

雑感

新井義史

91

就職情報

本年度の「道」の教員採用試験は、分校全体の合格率が90パーセントを越える異例の好結果であった。

美術科においても受験者全員が合格する快挙を得た。しかし殆どの受験者が登録されているのだから、今年は明らかに学生の質とは無関係に、単に需給バランスによるものなのであろう。

在校生が、こうしたかりそめの現実を見誤ることなく地道に学習活動が続けてくれることを願っている。

アトリエ・スペースの拮据

過日、アトリエ所有のH型イーゼルを確認してみたら22台あった。現在の美術科の学生数が30数名に対しては異常に多い数である。うち10台を捨てた。その結果約四帖半程のスペースが出来た。

私も制作は自宅で行うようになったから私がせしめていた十帖ほどのスペースも学生たちに返却した。

広いひろいアトリエに四名の学生である。しかし、現在の学生たちはその広さを、かつてのように、キャッチボールやトランプをすることなくいまのところ有効に使用しているようである。

個展の感想

昨年、二度の個展を行った。こうしたかたちでの作品発表は初めてであった。

幾ばくかの不安と、それなりの準備を持って望んだのであるが、終えてみると、またやりたいという気持ちが沸き起こってきた。個展には、相当の費用と時間とエネルギーが必要である。多くの制作者たちがそうまでしてなぜ幾度も個展を繰り返し返して行く気になるのかがそれまでは分からなかった。

しかし、自分でやってみてその理由が分かる気がした。

個展会場とは、「制作者の自己陶酔の場」なのである。自分ひとりの夢が遊ぶ、非現実の固有な夢幻空間なのである。集団や複数の人間でおこなう発表形式とは根本的に異なる精神体験であることを初めて知った。相当にくだらない作品を毎年毎年並べている人達の気持ちが、今は良くわかる。百パーセント自己満足の世界なのである。

よもぎやまの訃

3月に宗森君が結婚するという。ご招待を戴いたが、私は自分の式も、親に泣きつかれ止むなく行ったような人間であるから失礼させてもらい、かわりに六、七分のメッセージを代読してもらおうことにした。

私の時は、高校時代の同級生が勤めているところで行ったから、随分こちらの言い分を聴いてもらった。自分たちがやりたくないことを外していったら殆ど何もなくなってしまった。「これでは一時間もないから、これとこれは・・・」と幾つかを復活し何とか体裁を作った次第であった。

葬式にしろ入学式・卒業式・成人式なども形ばかりでどうにも耐えきれない。今後もし、おさだまりのスタイルにこだわることなく内容本位の、二人で考えた式を挙げたい。二人で参加しますのでぜひご連絡下さい。「・・・殿」などで、やむなく華麗に行う際には、祝電かメッセージで御勘弁して戴きたいと思えます。

「常識的」という無思想な非常識に抗いながら生きていくことは、なかなか大変ではあるが、世の中、許せないことが多すぎるようだ。

91 アトリリ工展 概評

本年度の「アトリリ工展」も、予想以上の好展示のもとに過日終了することができた。四人の在校生にOB・G諸氏の協力を加え、展示しきれない程の量と斬新な意欲作による展示であった。昨年の展示も良かったが、今年の展示はもっと良かったと思う。

なによりも、既成の価値観におさまらずに、伸び伸びと自分の持ち味を發揮しきれているところが良かった。

その一因には、大学内での展示により運搬や展示が容易であり、その分自由な造形作品が出来たことにもよるのであろう。

在校生には次回には、もっともっと破天荒な作品を望みたい。材料・方法・展示そして保管など、それらの物理的な制約を一切考えずに、展示期間中のみにしろ、閃光のごとき目映く輝く作品を指向してほしい。
若きエネルギーに満ち満ちた圧倒的な

存在物、あるいはとんでもなくバカバカしい感覚をさらけだして欲しい。

学生である今しか出来ないものであるから

昨日（二月十五日）文化会館の「釧路市所蔵作品選抜展」を覗いてみた。概要は大体知っていたが、会場全体の作品が、まるで戦前のものであるかのような錯覚に襲われた。もちろん鑑賞者はほかに誰もいない。作品だけが虚しく壁に吊るされている。

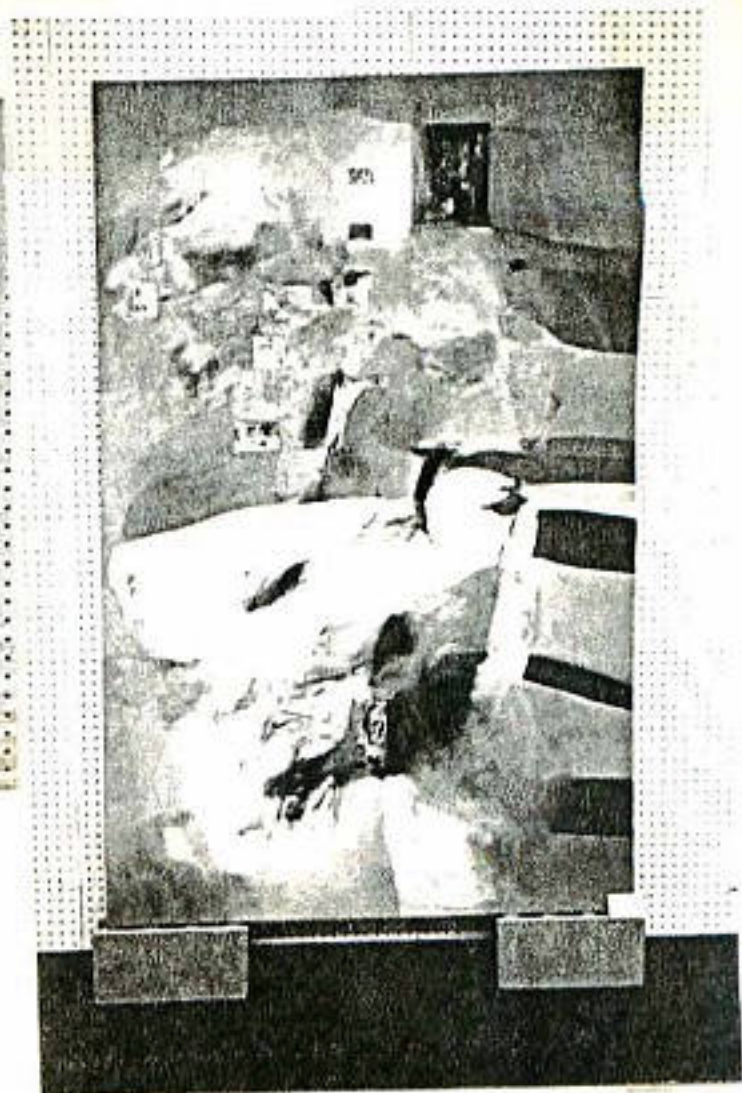
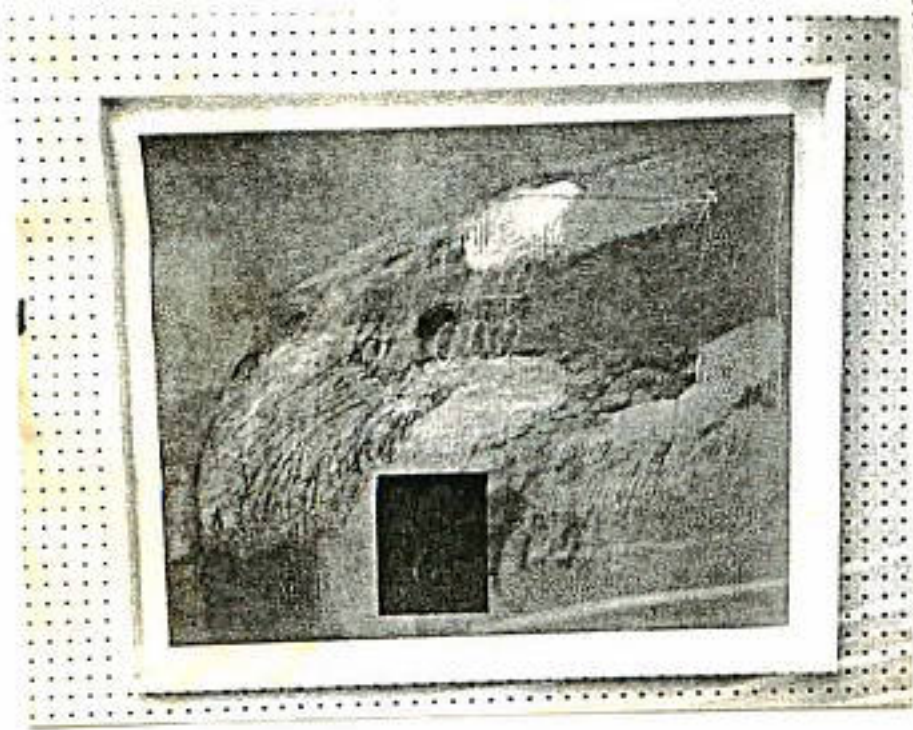
パンフレットに記載された教育長の言葉である「釧路市の貴重な文化財・・・」は『ただのゴミ』としか思えなかった。世の中に有る多くの物の価値観とは、きわめて曖昧なものであるから、自分がつくり出すものが灰塵に帰す代物であっても一向に構わないだろう。そのぐらいおおらかな気持ちで、どんどん何かをし続ければよいのである。

一応、独断的に「評価」を付けたが、これはユーモアの範囲として軽く受け流して欲しい。

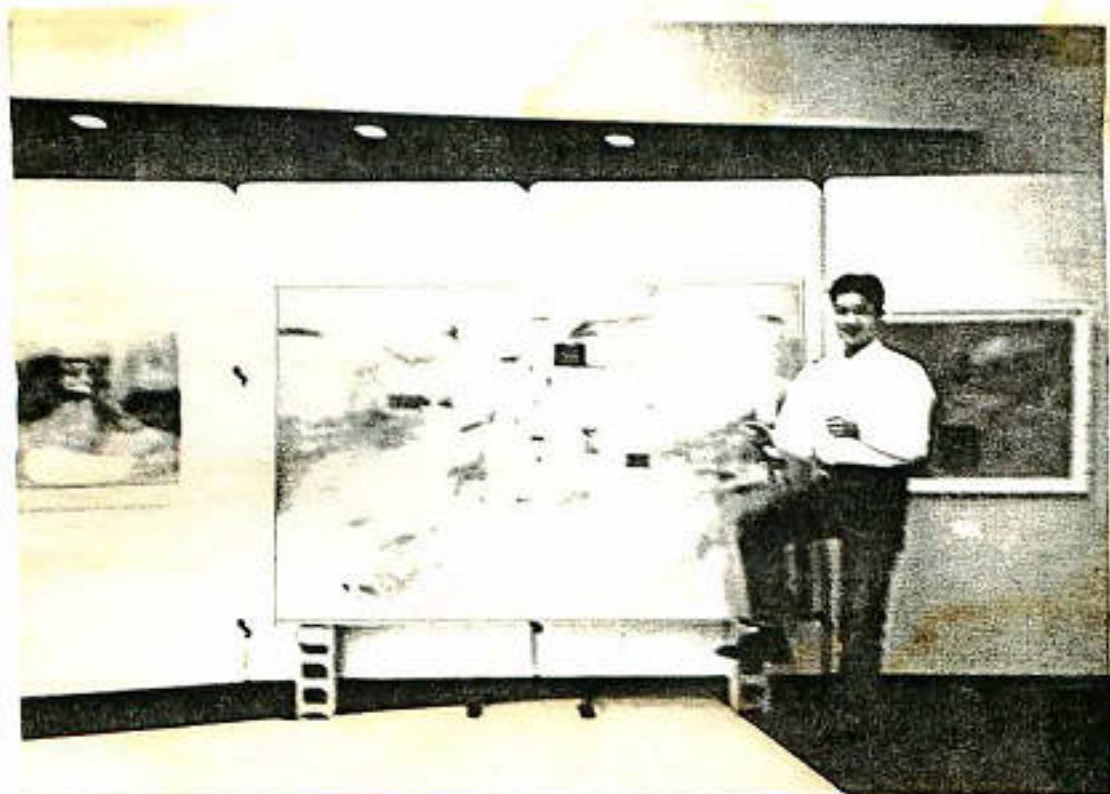


新井義史

総括



間山正樹



祝
卒業

間山正樹 4年

彼にとっての最後の「アトリエ展」である。思い起こせば、彼は一年終了時に一度は彫塑専攻の志願兵となるも、彫刻的造形能力の軍備不足を自認し、アトリエに入ってきた流れ者であった。

以下『評論—間山様式の変転』として述べることにする。

アトリエ所属当初、彼は一日の制作時間と清掃時間が同一である程の、鉄壁の潔癖症をもって清く正しい画面を描いていた。そして、自分が使用する床を連日水拭きによって磨き上げていった。

彼の領土である三メートル四方の床に足を踏み入れると「突然、滑る」というまさに「地雷源のような輝ける王国」の中で、彼の三年間の制作は続けられたのであった。

三年生までの彼の制作方法は、一般には「清掃描法」と呼ばれている。この描法は「描いては消す」行為を限りなく繰り返し、画面の清潔さをどこまでも維持するところに特質があった。

そんな彼の描法も、四年生になる頃には、周囲の雑多な環境に影響されてか、

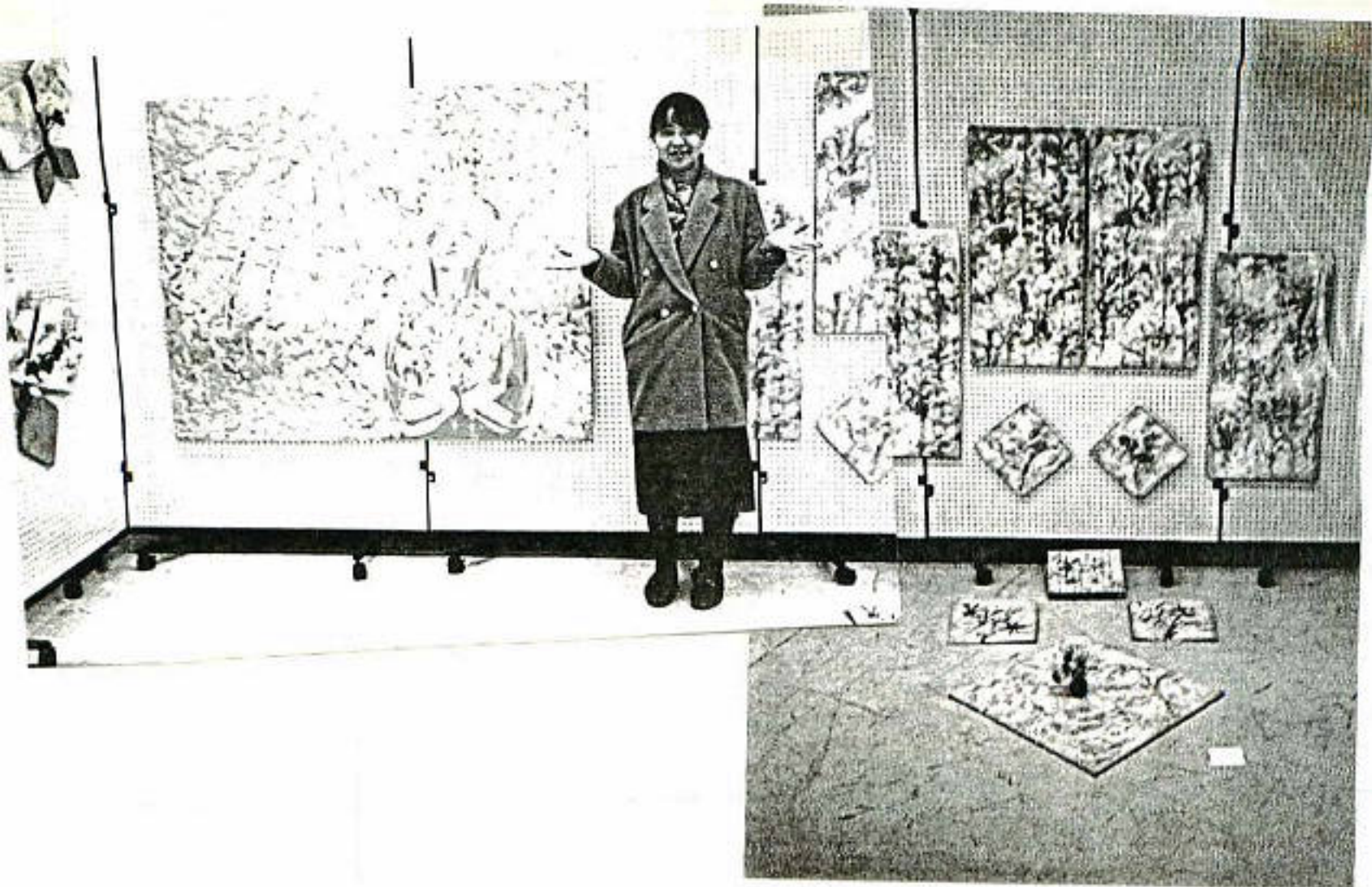
次第に廃棄物が拭いきれなくなってきた。つまり世に言う「残留ペインティング」に移り変わっていったのである。

アクリル絵具で描き（拭き取り）—油絵の具を重ね（拭き取り）—コピーや描画物をカラージュシー（はぎ取り）—クレヨンを塗り付け（削り取る）。

手法としては「清掃描法」ではあるものの、一枚の画面を数カ月かけて、拭いきれなかった残留物の痕跡による堆積物が結果的に画面を作り上げていくという、この特殊な描法によって、彼は今回の卒業制作に辿り着いたのであった。

しかしながら、現在のところでは、図版に見られる中品（額つきの物）程度のサイズのものまでは、彼の表現は上品にまとめ上げられるのであるが、百号を越える大作になるとポイントが散乱し、イメージとしてのまとまりがいささか弱いのが弱点である。つまり、細部へのこだわりがまだまだ強すぎるのである。

おそらく、彼のリリックな雰囲気をかもし出すことにかけての「才能」を疑う者は誰もいないであろう。しかし、彼の優れたセンスが個人様式として確立しうるためには、まだ後十年間は「毎日が大掃除」の制作の日々を続ける必要があるのかも知れない。



瀬尾里香 二年

評価	8の上	合格
----	-----	----

和紙ドローイングを開始して一年の成果が今回の作品群である。これらは、昨年の作品の継続であり発展ともいえる方法であるが、持ち前の「色感の良さ」を生かし、淡い色調でオール・オーバーな画面を創出している。

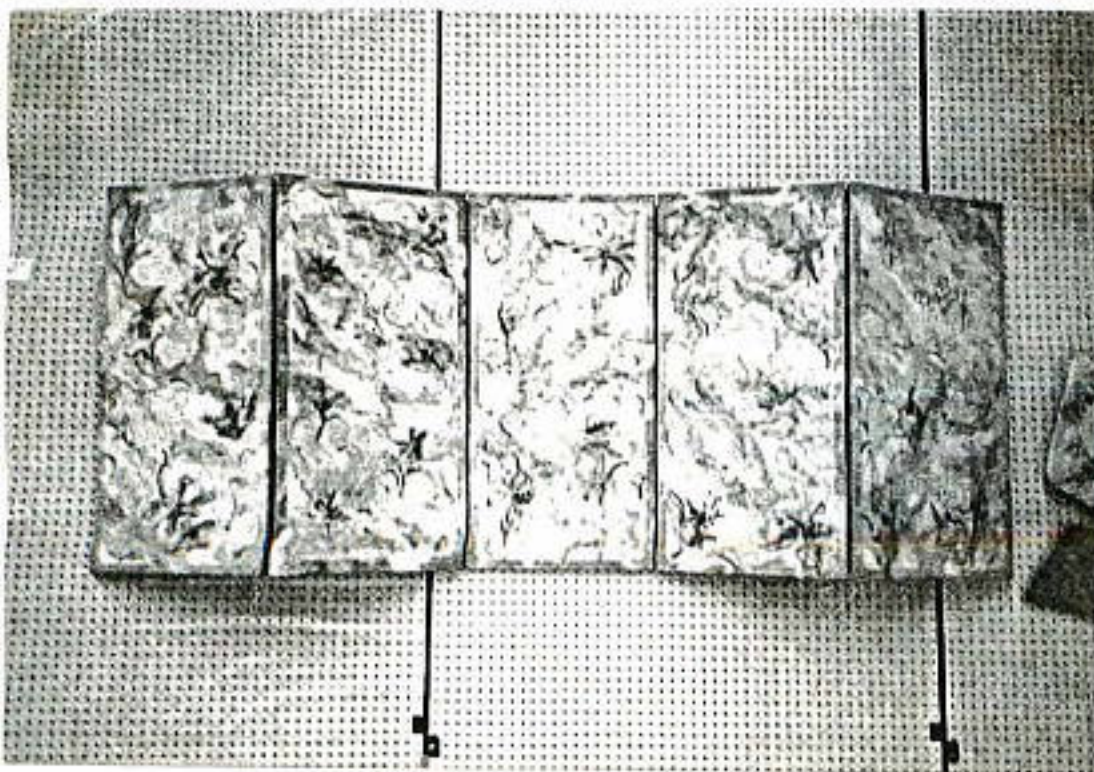
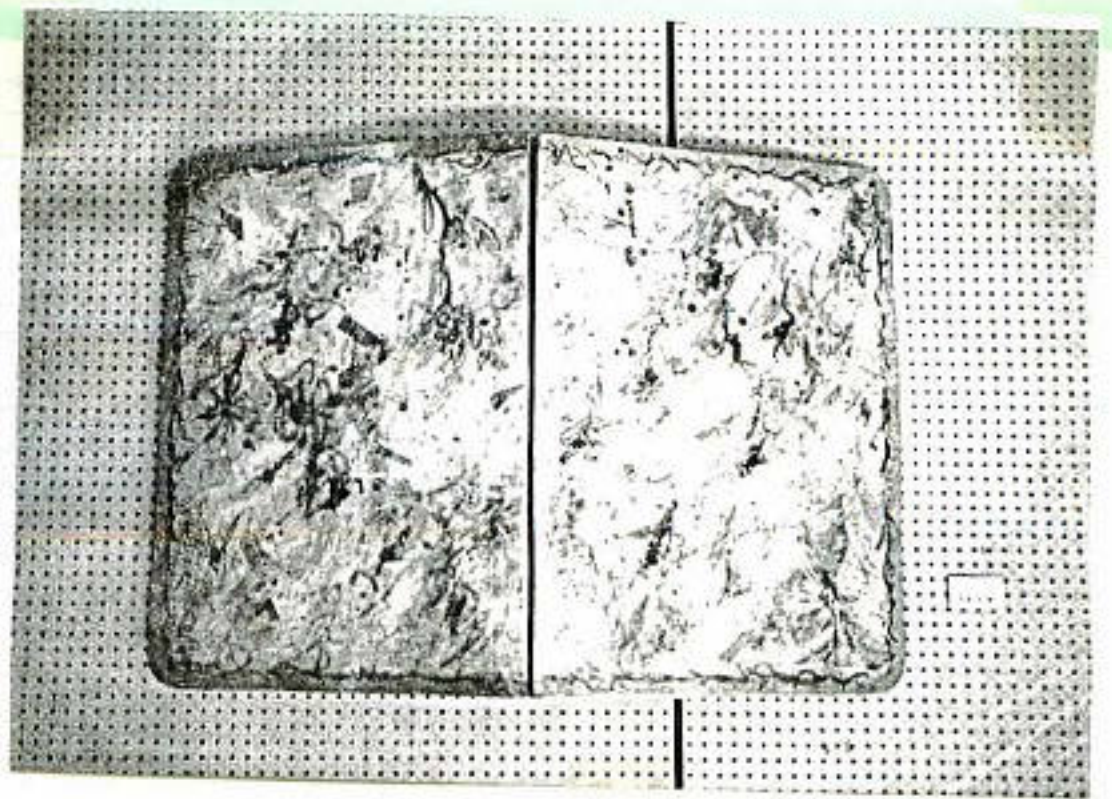
山形の田舎娘が短期間のうちに、ここまでやるとは、米沢の御両親もさぞや驚いていることであろう。

さて、一見飄々と作り上げられたものにも見えるが、作品には表れない彼女の表現上の努力が、じつは相当潜んでいることを見逃してはならない。

整然とした「間山王国」の対岸に位置した「瀬尾立国」には、諸材料がうずたかく積み重ねられている。これらの雑然とした素材を用いて試行錯誤された結果が、今回の彼女のドローイングなのである。

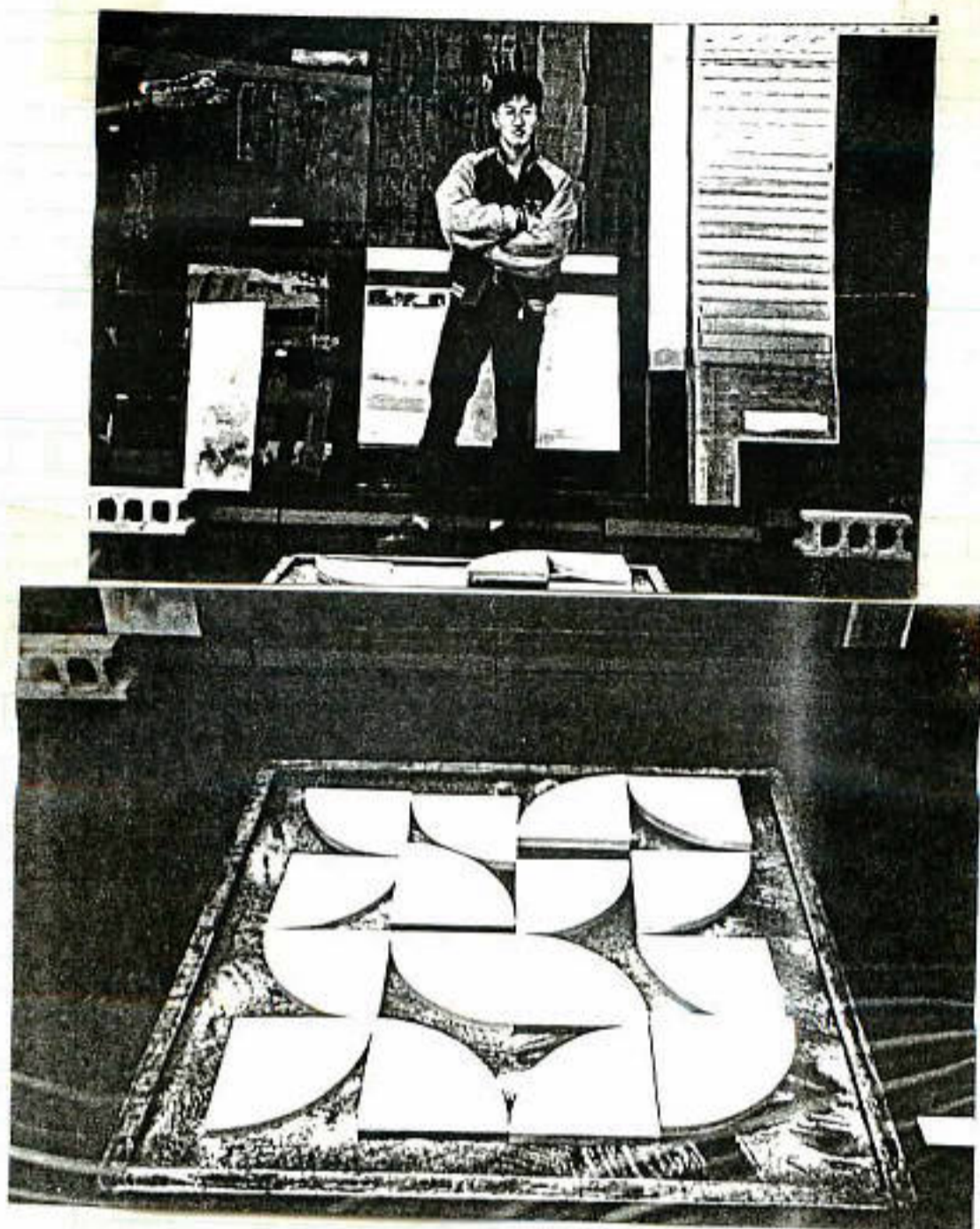
多少手厳しいかもしれないが、二点程評価を述べておきたい。

第一に、ムード優先のこれらのイメージは、効果的ではあるものの描かれた



用にいまひとつの「切れ」が欠けている。
一本一本の線あるいは面にさらなる集中心
と緊張感が欲しい。

第二に、インスタレーション的な展示形
態が作品の特質を発揮しきれていないとい
うことである。表現の淡さが展示パネルの
物質感に負けていることが原因である。そ
の点では、五つ折の作品が展示としては一
番効果的であるが、またまた画面の「表面
にのみ関心が向きすぎている」ことがその
理由である。作品の存在は「それ全体の存
在」によってこそ作品たりうるのである。
『モノとしての作品、事物としての作品の
存在性の追求』これが、彼女の次ぎなる課
題と言えるのであろう。



加藤 恒 一年

評価 8の下 合格

彼は山が好きである。風景画が得意であった。アトリエに入室直後に大雪の山を描いて私から一蹴されて以後、約三ヶ月アトリエから姿が消えた。

おそらく、暗く悲しい日々を苦しみぬいたようである。やっとフツキレて取り掛かったものが、一気にスタンピングを中心とした抽象表現であった(偶然の発見であったことは秘密にしておこう)。ともかくそれらを基に雄大な構成による一種の面的な表現に辿り着くことができたのである。

写真で見たり、遠くから離れて見るとなかなか良くまとまっているように見える。しかし、近寄ってみると、素人さんは誤魔化されてもプロが見ると、いかにも頼り無い画面である。まだまだ初心者の域を出ていないのである。

今後は、絵具の着き具合をいかに強力で説得力のあるものにしていくかが課題である。ヘラヘラとした笑顔で世の中は渡れない。本領発揮まであと一年と見る。

大江陽子 二年

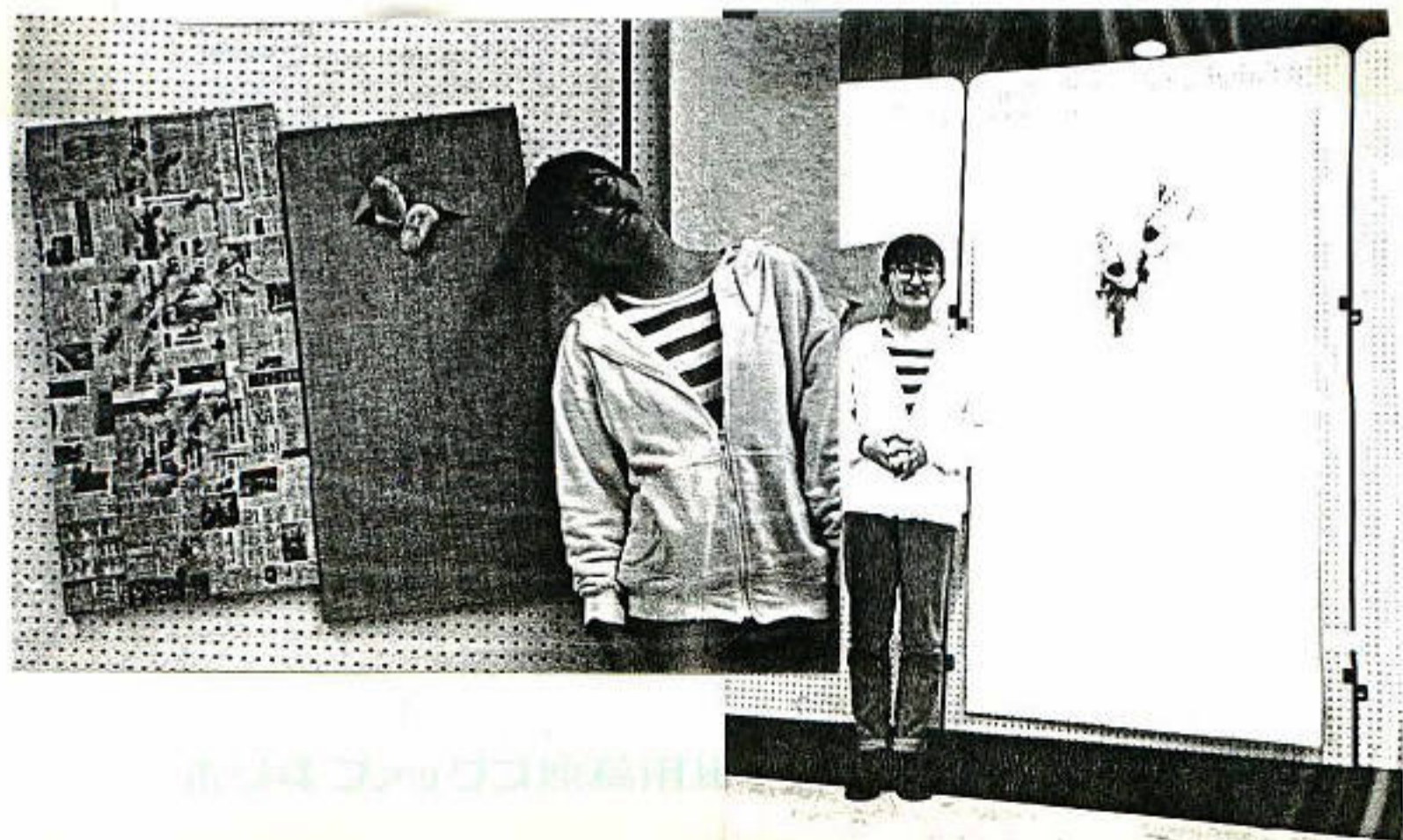
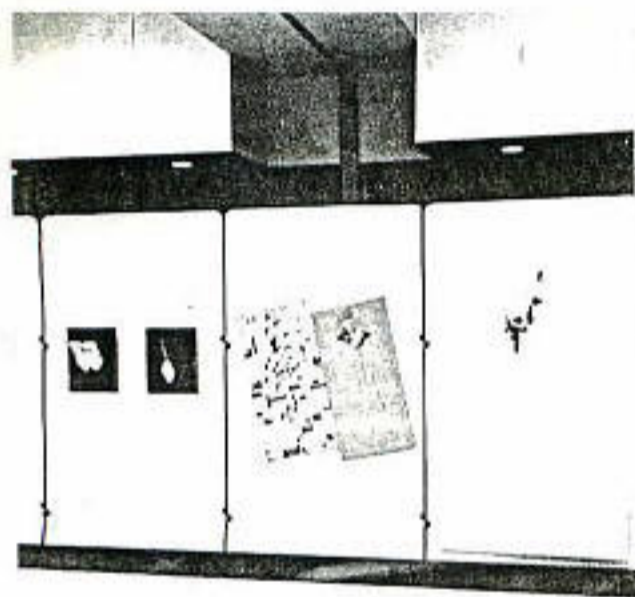
評価 8の下 合格

彼女は、入室時に加藤君のように、それまでの自分のごくオーソドックスな描写方法を継続しようとはしなかった。間山・瀬尾、両君によるアトリエに漂う「ゲ・ゲンダイ美術もどきの風」を敏感に感じとり、スタートの時点から自分の過去を捨て去ることから開始しようとした。

が、類にもれず、数カ月は何も手に付かぬ様子であった。だいたい夏休み前はほとんどアトリエにいなかったのであるから。

初めての彼女の作品らしきものは、画面から指が飛び出た「ホラー映画」もどきの『驚愕絵画』であった。

指に始まり、顔、手、クツなど、リアルな実在物と平面とのジョイントというスタイルが今年の彼女のプレタ・ポルテであった。本人がどこまで意識しているのかは判らぬが、実はこれらの傾向は、六十年代半ばからのアメリカン・アートの本流なのである。期せずしてはやペインティングでもない位置に身を委ねてしまった彼女の作品は、いったい何処に向かおうとしているのだろうか。





菅谷誉紫子 61年卒

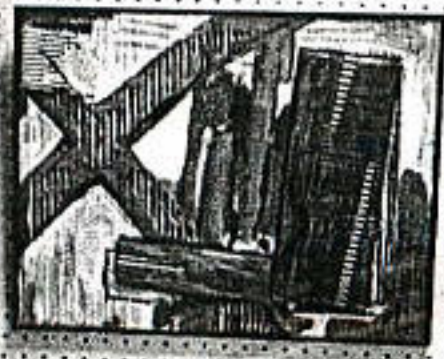
評価 7の下 やっと合格

綿布・紐の画面への貼りつけによるこの作品は、昨年までの菅谷さんの、固い表現からの脱皮を目指した意欲の現れであろうか。その意欲は買える。しかし、まだそれぞれの素材が現実のモノのままである。こうした表現に必要なことは、使用する素材のひとつひとつが、それを扱う者の心と響き合い、精神を伴って使用されなければならない。素材を手に取り・味わい・愛でる姿勢を深めていって欲しい。

宗森研介 62年卒

評価 8の下 結婚祝の御祝儀

地元以外から作品を送ってきたことは大い評価しうる。作品の内容に関して、良くも悪くもない。こうした素材を使用した作品は額装がたいそう難しい。素材の質感を生かし、展示方法に工夫をこらすことが内容を生かすことになる



川村絵理子 62年卒

評価 止めとききます

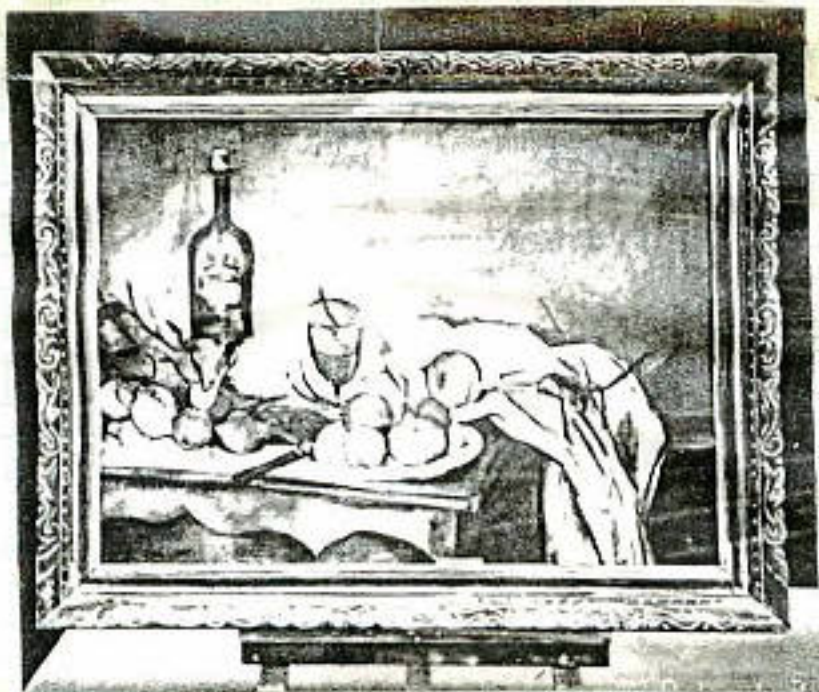
かつて見たことがあるような気がする。そろそろ浮いた話はいまいませんカ。



大橋 拓 63年卒

評価 評価論外

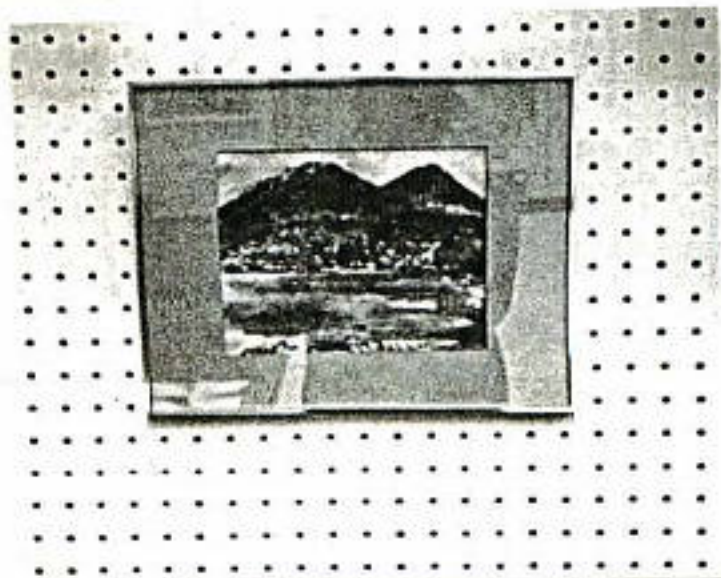
セザンヌの作品である。可愛い奥さんに
明るい未来を予感させるような作家的な仕
事をしなはれ。



伊藤 恵理 63年卒

評価 評価論外

昔の、オンネトーでの研修旅行の水彩画
という。新作が見たい。



松久 充生 63年卒

評価 8の下 昨年の方が良い

今年は小品二点である。技法面ではも
はや安心して見られる画面である。(そ
れにしても、彼がこのように安定した
面作りが出来るとは！「松久さんの糸
が欲しい」との声を長く聴いたのだから)
今回の黒地の一枚の作品はともにせつ
かくの大きなイメージが、額に押し込ま
れて窮屈に見える。今後、こうした小品
を手がける際には、画面にゆとりを持た
せ、額装を配慮する必要があると思う。



* 90年度 資料採集調査旅行の思い出 *

私にとって、3度目の研修旅行。今年のコースは、道央の旭川、富良野、4泊5日の旅でした。初めての道央、なんとなく怪しげな天候の中釧路を出発。帯広まで行かぬうちに雨が降り出し、見る見るうちに滝のような雨。晴れていたなら綺麗な狩勝峠の風景もほとんど見れないまま、旭川での宿、美岐へ向かいました。1泊1500円という驚くほどの安さだけにどんな所か不安でしたが、着いてみたら、つぼや錦絵のような古美術品が薄暗い廊下に並べられてある他は、いたって普通の旅館でした。

二日めは、市内を見学し、旭川分校へも立ち寄りました。旭川分校の学生との初めての交流にすっかり息統合し、その夜は合コン。先生一人を残して、我々5人は、夜の1時過ぎまで学生たち（15名程）と語り合いました。最後には、公園での花火大会まで盛り上がり、本当に楽しい一時でした。

三日目、旭川ー富良野へ。初日の天候が嘘のように晴れ、30度近い暑さ、途中立ち寄ったラベンダー園（ファーム富田）でのラベンダー色のカルピスが実に美味しかった。この日の泊りは「北の国から」のロケ地のすぐそば「ふらりん」。小さな2人の子供のいるヒゲの主人と奥さんが、優しく迎えてくれた。

四日目は、富良野そして美瑛をドライブ。美しい景色の中を走り、美馬牛の拓真館へ。ギャラリーに入ると、今見てきた美しい自然がそのまま写真となって展示されていた。この日の夜には、金工とも合流。

雨で始まった今年の研修旅行でしたが、富良野の美しい自然がとても印象深い旅になりました。ただ、車でのかけ足の旅だったので今度行く時には、のんびりとまわりたいと思います。最後に深ちゃんが参加出来なかったのが、ちょっぴり残念です。

4年生 間山 正樹

私は、今回の旅行でかなりの思い出（キズ）を残した旭教大生とのコンパについて述べます。

バトルは彼らがいつも利用しているという釧路でいう「さかきま」を大きくしたような店で繰り広げられました。いきなり釧・旭まで座ったのですが私は人見知りするタイプなので（アルコールがはいると別人）緊張しまくってしまいました。そして、やっと酒がまわって話がはずんできたところで悪夢の「シリトリタイム」がやってきました。そし専攻生らしい「西洋のアーティスト」を順番にあげていこうという企画にはポロポロ出て来ました。私は「ザ・グレートアーティスト」を購読しているし「これは出来る」と思いましたが、答えられたのは忘れもしません「コロー」のみでした。それとは裏腹にポンポン答えていく周りの人を見つめながら一人「いじめられっ子の辛さ」について考える加藤でありました。

悪夢の時間が去り一次会のクライマックスがやってきました。僕たちは、「乾杯」を歌うことになりました。肩を組合って「かたいきずなに・・・」と合唱しました。「すばらしい人達に出会えて私は幸せ者だなあ。」と感じ乍ら、一際声を張りあげて歌う加藤でありました。

「乾杯」二次会を終え余韻を感じ乍ら二次会の花火会場へ自転車走らせました。そう、いきなりアスファルトが私の右ヒジを襲いました。私は転んだということに気付くの

に5秒費やし右ヒジに痛みを感じるのに5分費やしました。ピョンピョン跳ねることしか出来ない私の横で「天理教」を歌う間山さんの姿が印象的でした。私はここでもかなりの思い出（キズ）を作りました。

ともあれ無事コンパも終わり旭川での良い思い出となりました。

「いやあ、楽しかった！」

2年生 加藤 恒

初めて「欠席届」なるものを使用した喜びでいっぱい資料採集調査の思い出はやはり（1）旭川分校美術研究室の人たちとの交流、（2）スケッチしなかったけど単位は出してくれるのかな！？、（3）アットホームで思わず心がなごんでしまった「ふらりん」、この三つです。

旭川分校美術研究室の人たちとの「昼」の交流では、研究室の狭さと授業内容の違いに驚きました。工芸研究室のないこと、絵画研究室が二つもあることも何だか不思議な気がしました。人数が少ない上に広いスペースを使っている私達はもしかして幸せなのかもしれないと思いました。「夜」の交流では、私は少し緊張気味だったけど、緊張のカラオケも見せずに見知らぬ人々の中ですでに中心人物になりつつあった間山さんはやはり偉大な人だと思います。人の自転車を壊してしまった加藤君もまた偉大だと思います。

スケッチの予定を変更して行った美瑛町は景色が大変きれいでよかったです。特に「マイルドセブンの丘」はどれがそうなのか全然わからなかったけど最高（！？）でした。ただ天気が悪かったのだけが悔やまれます。十勝岳のそばまで行っても霧でその存在が確かめることができなくて悲しかったです。

そのひ金工の人たちが富良野に到着し、「ふらりん」での「お茶（お酒）の時間」はにぎやかでした。特に新井先生と加藤先生は小川さんの姉である伊藤さんを挟んで楽しそうでした。でも、ふらりんが一番印象に残っているのはあの「お風呂」です。あの壁画の中のふらりんファミリーは妙に存在感があって、視線を合わせなあいように気をつかいました。

余談ですが、お土産を買わなかった私はフィッシャーマンズワーフmooで「富良野ワインチーズ」を買い、何くわぬ顔をしてバイト先に持って行ったのでした。何はともあれ本当に楽しい旅行でした。新井先生、車の運転御苦労様でした。

2年生 大江 陽子

昨六月末に家が完成し転居した。
阿寒町のはずれの牧草地に囲まれた、のどかな田舎暮らしを開始して八ヶ月になる。

釧路に来て九年である。そろそろ先行きも見えてしまったし、二人の子供もいつのまにか成長してゆく。いつまでも狭い官舎で汲々として、地に足が付かぬ生活を過ごすこともないと思いい切り、家を建てた次第である。

過日、宗森君から電話があった際「一度家に帰ったら大学に出るのは大変でしょう……」「……?」「どうも話が合わないナ……」と思つたら、彼は、私が『阿寒湖畔』に住みはじめたと勘違いしていたらしい。

いくら私でも、そこまで無謀なことではない。私の家は釧路と湖畔との中間にある「阿寒町・本町」であり、車を使えば、釧路空港から十分、雪がなければ三十五分で大学まで行けるのである。

たしかに、いま私は、大学職員の中で最も通勤に時間がかかる位置に居住している。内地感覚からいえば、通勤に一時間ぐらいかかるのはしごく当然なことであるが、この近辺では、三十分以上かかる位置に家を構えるなどは、変わり者だと思われているらしい。事実、多くの人から首をかきげられたのであるから。

私は自分の家を建てるに際して二つのことを前提に置いた。ひとつは、子供達が伸び伸びとした自然の中で、健康に幼年期を過ごすこと。第二は、制作のための広いスペースを得られることであった。つまり、霧が出ず、地価が安い土地ということである。

当然、釧路市内は除外され、山間部の鶴居か阿寒町のいずれかに絞られることになる。(こう言っただけだが、子供の教育条件は最早あきらめていた。学校教育にはほとんど期待していないし、むしろ自然環境の方が大切だと思っている。)

住宅のために分譲されている土地、いわば、市販の土地を探そうとは思わなかった。阿寒町には不動産屋など居なかつたから、役場で状況を聴いたり、レンタカーであちこち走り回り目ぼしい土地を捜し当て、土地所有者と直談判である。結局、百四十坪を程々の値段で手にいれたのであった。

家屋の建築に関しては、始めからミサワホームを始めとする『セネ・コン』などは除外していた。モデル・ルームを数度見学し、その見かけ倒しの外観と内装の施工の酷さ、そして対応社員のみならずにも無知加減に辟易した。

その結果、一匹狼の建築士を捜し出さざるを得ず、彼を通じて施工者を選定する、いわゆる『分離発注方式』をとることになった。この方式は、後で知ったことであるが、現在最も理想的な方式と考えられているもので、大工・左官・内装などの十数種の業者と各々の契約関係を交わすものである。その結果、私の家は、この窓サッシがいくら・蛇口・電気コンセントがいくらであるのか等、家中の部材の殆どの定価と割引率と施工費用とがいくらであるのかが明瞭に把握できるのである。

設計には一年かけ、プランは九回変化した。思えば設計士とは面白いものである。こちらの希望を聞きいて図面を引いてくるものの、こちらが何やかや文句をいうと、「考えて見ましょ」と答えて、次回に来る時には、前とは全く違ったプランを持って来るのである。

